



「チームで楽しんだよ。」
おしりリレー

協力園
学校法人別府大学
春木保育園

「楽しかったあ〜、2チームともバンザーイ！」

「バトンを両手でつかむ方法で〜」

「バトンを片手に持って、前へ、前へと〜」

「やってみよう！」

活動後の集まりの中で、「楽しかったあ〜、2チームともバンザーイ！」と喜び、青組は、「あーあ」の声が聞かれましたが、「楽しかったなあ〜」と言い合っている姿も見られました。

活動後の集まりの中で、「楽しかったあ〜、2チームともバンザーイ！」と喜び、青組も黄色組も、頑張っていたね。」と保育者が声を掛けると、「なかなか、進まんなあ。」、「青組はバトンを前にもったなあ。」、「黄色組は、一つの手でもったなあ。」といった言葉に、バトンの持ち方の違いを、子どもたちが気付いていたことを保育者は知りました。そして、「青組も黄色組もバトンの持ち方を工夫したんだね。今度は、青組の持ち方をみんなで作ってみたり、黄色組の持ち方をみんなで作ったりして競走してみようか。」と子どもたちに投げかけると、「やるやる。」と、意気込んでいます。今日は、勝敗より、チームの友だちと同じ動きで体を動かす面白さが楽しかったようです。

チームでバトンの持ち方を話し合ったわけではありませんが、先頭の友達を真似、同じ方法を取り入れながら、最後まで頑張ろうとする姿から、仲間意識の芽生えを感じ取れます。仲間とチャレンジすることの面白さを感じた子どもたちは、共通の目的の実現に向けて心を通わせ、やり遂げようとする姿へと成長していくことが予想されます。

（幼児の実態）
運動会の時期になると、リレーが大好きになった4歳児クラスの子どもたちは、戸外に出ると、かけっこやリレーを友だちと誘い合っている姿が見られます。スピードを競い合うことを楽しみ、同時に、友達にバトンを渡したり、渡してもらったりして、バトンをつないでいく面白さも味わっているようです。

「こっち、こっち、ほく、ほく」と手を伸ばして、真剣にバトンをもらおうとする姿もあります。

そんな子どもたちにとって、今日はあつい汗の雨になりました。

テラスから園庭の様子を見ながら「雨やなあ。」と残念そうな声。「水たまりもあるしなあ。」と声を掛け合う子どもたちの様子に保育者が「お部屋でできるリレー、やってみる？」と声を掛けています。

以前、表現遊びをした際に、子どもの動作から偶然生まれた『おしりリレー』を、保育者の声かけで子どもたちも思い出したようです。

『おしりリレー』は子どもたちがその時、名付けた呼び名で、床をおしりで滑っていくリレーです。

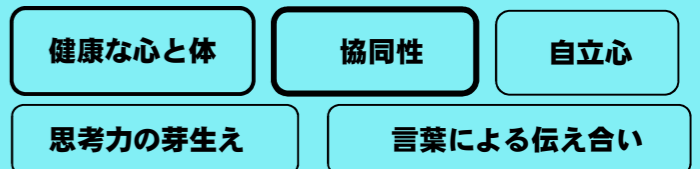
『おしりリレー』の声を耳にすると、床の上をすでに滑り出す子どももいますが、保育者と一緒にカーペットを片付けて準備する子どもの姿も見られます。保育室はこれからチャレンジに向かう興奮の空気です。

保育室の準備が整うと、すぐに青組と黄色組の2チームに分かれて並び始めています。運動会のリレーの練習の中で、決まっている順番を受け入れているようです。先頭の子どもがスタートラインに並びました。並んだことに気付いた保育者が、バトンを渡します。待っていましたとばかりに、バトンを持つと、自然に『よいい』のポーズです。「おしり、つけん」と、友達の声で、先頭の2人は、「そうやったあ〜」と、おしりを床につけたポーズに変えました。バトンは片手に持っています。そして、「用意はいい？さあ、笛を吹くよ。」と合図をする保育者の様子に釘付けです。

「ヨーイ、ドン！」の合図と同時に、前に進むように思いますが、思うように進めません。前に進むように必死になり、バトンを持っていない方の手を床につき、手で漕ぐようにしながら進んでいます。横をチラチラ見ながら、両組とも、同じようにバトンを持っていない片方の手を使っています。しかし、青組4番目のA児は、自分の番になると、両手でバトンをつかみ、床に手をつくことをせずに前に進んでいます。A児の後の子どもも、A児と同じ方法で進みました。その後の子どもも、同じです。バトンを両手でつかみ、反動をつけて進むやり方が、青組に広がります。黄色組は床に手をつき、進むやり方が続いています。結果、勝負は黄色組が勝ちました。

2チームの進み方が、それぞれ違ってきたことに、子どもたちは気付かないのか、捉われないのか、そのことは気にならないようです。「もう一回やりたい！」と、両チームとも再挑戦に意気込んでいます。保育者は、2チームのやり方が違っていることに、「どうしよう」と、躊躇していました。もう一度、それぞれのチームのやり方で、競走することにしました。2回目も、『黄色組は、片方を床に手をつきながら進む方法』、『青組は、バトンを両手でつかみ進む方法』で、スタートしています。決めたわけではないのに先頭の子どものやり方が次に繋がっています。勝敗の結果は、今回も同じく、黄色組の勝利です。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿
「10の姿」



友だちと関わる中で、互いの思いや考えを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

事例から見られる10の育ち
協同性

並び順番を自然と受け入れ、リレーに向かう準備をしていることや決めただけではないのに、それぞれのチームが同じ方法で、同じ動きを楽しんでいる姿から、受け止め合っている安心感、満足感が感じ取れる。

保育所生活において、保育者との信頼関係を基盤に、クラスの友達との関わりから、仲間意識が芽生え、運動会に向けての活動を通してさらに、「自分のチーム」の存在を意識し、一員であることを認識していくと思われる。

同じ動きを楽しみ、同じ楽しさで笑う時間を持ちながらゆっくりに仲間になっていくのではないだろうか。

事例から見られる10の育ち
健康な心と体

前へと進まないことの困りに向かい、体の諸部位を動かし、自分の持っている力を発揮しながら、最後まで頑張ろうとする姿が見られる。

友だちのやり方を見て、同じ方法でやってみようとして、チームの一員として、主体的に取り組もうとする意気込みが感じられる。

活動に向けての保育室の準備、順番に並びながら、自分たちの活動に、見通しを持って取り組んでいる姿が見られている。

協同性
環境構成のポイント

- 保育士等との信頼関係を基盤に、友達との関わりが仲間意識の芽生えに繋がり、互いに認め合える友達の存在。
- 子どもたちで発案し、友だちと一緒に楽しんだ経験のある遊びを取り入れ、安心して自己発揮できる状況を作り出した。
- 次回のリレーの楽しみ方に見通しを持たせる保育者の言葉掛け。(バトンの持ち方の気づきを次回に生かす投げ掛け)
- 最後までチームでやり遂げ、満足感を味わえることにつながる保育者の見守る姿勢。(バトンを持って前に進む様子やルールの必要性があるかどうか、焦らず見守っている)